

【論文提出者】 社会文化科学研究科 教授システム学専攻  
加藤 泰久

【論文題目】

フロー理論に着目した学習教材・学習環境の再設計支援手法に関する研究

【授与する学位の種類】 博士（学術）

### 【論文審査の結果の要旨】

加藤 泰久氏が提出した博士論文「フロー理論に着目した学習教材・学習環境の再設計支援手法に関する研究」は、独創性・有用性ともにすぐれた研究業績であり、以下の経緯で審査委員会は本研究科に提出する学位論文として博士号にふさわしいとの判断に至ったことをここに報告します。

#### ① 論文の位置づけと審査経緯

本論文は、フロー理論に着目した学習教材・学習環境の再設計支援手法をまとめたもので、他に類を見ない独創的な研究である。加藤氏が提出した博士論文に対して、審査委員会は平成 24 年 11 月 15 日付で修正要求を通知した。それを受けて、修正論文が平成 24 年 12 月 15 日付で提出された。それを受けて平成 25 年 1 月 31 日、審査委員全員出席のもと審査委員会を開催し、修正論文に基づく口頭発表及び試問を行った。

#### ② 本論文の示す新知見と独創性

本論文は、教授者・教材設計者に対して、学習教材・学習環境の再設計（改善）に関する活動を支援するために、フロー理論に着目した再設計支援フレームワークを提案したものである。第 1 章で研究背景と研究目的を述べたのち、第 2 章では、フロー理論に関する研究動向の調査・分析を行った。先行する海外と国内の研究動向を比較した結果、評価手法や研究対象が異なっていることを指摘した。また、フロー理論を組み込んだ学習モデルの文献調査を行い、新たなフレームワークを提案する際には、Kolb の経験学習モデルを基礎とするのが妥当であることを示した。第 3 章では、フロー理論に基づく学習環境・学習教材再設計支援のフレームワークとそのフレームワークを構成する 4 つの活動について提案した。第 4 章では、第 3 章で提案したフレームワークの実現可能性を検証するためにプロトタイプシステムを構築し、初期形成的評価を行った。第 5 章では、提案したフレームワークの主たる要素として用いられるフロー理論適合度チェックリストに焦点をあて、それが e ラーニング教材に適用可能かどうかの評価を多角的に実施した。専門家レビューと対象者による試用の結果、チェックリストの信頼性や感度、有効性の観点から、実用上の問題がないことを示した。第 6 章では、第 2 章から第 5 章までを考察し、今後の課題についても整理して述べた。フロー理論の教育設計場面での応用に着手した独創性は高く、今後の研究の基礎となる成果が得られたと言える。

#### ③ 本論文の評価

本論文の成果は、これまでに 3 回の査読付国際会議および 7 回の国内学会の大会や研究会で口頭発表により報告し、高い関心を得てきた。また、第 3 章で示した研究成果については、以下の査読付国際学術雑誌に採録されており、独創性が認められている。

Kato, Y. & Suzuki, K. (2011). An Approach for Redesigning Learning Environments with Flow Theory. *International Journal for Educational Media and Technology*, 5(1), 118-134.

### 【最終試験の結果の要旨】

加藤 泰久氏が提出した論文「フロー理論に着目した学習教材・学習環境の再設計支援手法に関する研究」をもとに、平成 25 年 1 月 31 日 16:00 より、審査委員全員出席のもと審査委員会を開催し、修正論文に基づく最終試験を行った。

その結果、学位論文の記述内容に関する質疑に的確に答えており、当該論文の先行研究の成果や限界等についての背景的な知識も豊富で、論考の過程も明確に整理されていることが分かった。また、研究の背景や教育工学的意義ならびに当該研究の限界や今後の発展の方向性に関する質問についても、研究の成果および本人のこれまでの学術活動によって得た見識に基づいた学識が披露された。

よって、加藤 泰久氏は、博士の学位を授与されるにふさわしい学識と研究遂行能力を有するので、最終試験を合格と判定した。

### 【審査委員会】

主査	鈴木	克明
委員	中野	裕司
委員	喜多	敏博
委員	合田	美子
委員	根本	敦子
委員	仲林	清